

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

特集
まるごと
加茂水族館
庄内憧憬
あがた森魚
ミュージシャン

7

2014 July/August
TAKE FREE
NO.24

Cradle 7
美しくつかしい、日本をのせて。
【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

2014 July/August
平成26年7月1日発行(隔月奇数月発行)第4巻8号(通巻24号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-16 [株式会社 出羽庄内地域文化センター] 電話235(64)0888
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市赤田2-59-3 [コア・コミュニケーションズ] 電話234(41)0012

FIDEA GROUP



庄内町 / ひまわりと響ホール

夏を見つめる 黄金の海

 庄内銀行

地域発信。言葉はたやすいけれど、愛とアイデアなくしては人に届かない。その場所で生まれたものを発信する、そういう鶴岡に來ると、生き返ったような気がする。

どういう巡り合わせか、このところまた親しみを増してきている山形県鶴岡市。

街道筋の古民家がそのまま蕎麦屋さんになった「大松庵」は、もう随分前から、僕のコンサートを企画してくれている。ここでのライブは生まれふるさとの本家に帰ってきたような気分になる。土間で歌い、親族郎党こぞつて記念写真を撮る、そんな風情。終わってからは蕎麦と地酒、そしてダンスパーティーが夜明け近くまで続く。一見、寡黙そうな店主ご夫妻が、そのつど集った人々を本当に楽しそうにもてなしてくれる。

そんな鶴岡の町に、今度は映画に出演するためにやってきた。

鶴岡出身の監督、富樫森さんが、僕の育った函館の町で『星に願いを。』のロケをしたときのこと。当時、助監督をしていた宮田宗吉さんと出会い、そのご縁で、今回新作を撮るので出演してほしいということになった。

その映画の舞台となるのが加茂水族館だった。僕の役はその館長だとい

う。じつは、本物の館長である村上龍男さんはすごい人なのだ。すでに知られている通り、水族館をくらげだらけにし、その種類数が世界一になり、ギネスにまで認定された。館内の展示やアイデアは、一途にくらげや水族館を愛してのこと。そんな館長さんの大役ではあったが、マイペースでやらせてもらうことにした。

映画の物語はこうだ。採用面接で「くらげになりたい」と答えた水族館の青年と、人生不幸続きだったとある女性とが、水族館で一夜にハイライトを迎える恋物語。くらげの生命は長くて約一年というが、二人の恋はつかの間一夜きりの恋だったのか？ 完成した作品を見終わった後、不思議な感慨が胸に迫った。

6月6日、『くらげとあの娘』の上映に合わせてミニライブをやるという形で鶴岡を訪ねた。映画館は鶴岡まちなかキネマ。かつての木造平屋の機織り工場の建物を改築したものだという。スクリーンが4つのシネコンスタイルだが、懐かしい木造校舎の分校に來た

ような気分させられた。何ともいえずなごむ。

ロビーにEssexのグランドピアノがあり、そこで一時間ほどのライブをやった。『くらげとあの娘』をたくさんのお客さんと観て、その後、映画の感想を織り交ぜながらのライブ。映画が発信された鶴岡の地で、地元の方々が私たちもコミュニケーション。素晴らしい一夜だった。

地域発信。言葉はたやすいけれど、そこに流れる愛と他愛のないアイデア。それなくしては人に届かない。古民家のお蕎麦屋さん。くらげだらけの水族館。機織り工場から生まれた映画館。その場所から生まれたものを発信しようとする人々。そういう鶴岡に來ると、生き返ったような気がする。

もともと、北海道の留萌、小樽に生まれ育った自分には、鶴岡の町の日本の海は故郷のつながっている大事な場所、光景でもある。

僕の知ってる『くらげとあの娘』と水族館と映画館とお蕎麦屋さん。またいつでも鶴岡に來たくなってしまう。



6月6日、鶴岡まちなかキネマでのミニライブ

あがた・もりお / 1948年、北海道生まれ。1972年に『赤色エレジー』にてデビュー。20世紀の大衆文化を彷彿とさせる、幻想的で架空感に満ちた作品世界を、音楽映画を中心に展開。2013年12月、41枚目のオリジナルアルバム『すびかたいず』アナログ盤、2014年3月にはCD盤をリリース。全国でライブを展開中。劇場公開作品3本を監督。俳優や執筆などでも活躍。日記映画を月刊で上映している。

惑星を思わせる大水槽

ミズクラゲが泳ぐ直径5メートルの大水槽は「クラゲプラネット」と呼ばれていましたが、加茂水族館では今年7月21日まで新たな名称を募集しています。応募資格は入館者のみ。館内にある募集用紙に記入して応募箱に投函します。来館したらぜひ応募を。

特集

まるごと 加茂水族館

地方の片すみにある古くて小さな水族館が、飼育や繁殖が難しいとされてきたクラゲで世界一に。今年6月に誕生した「クラゲドリーム館」に至る84年にわたる加茂水族館の軌跡をまるごと紹介します。

加茂町に誕生した 東北で三番目の水族館

1930-1997



ラッコ展示は
平成6年から



若かり頃の村上館長。
27歳で館長になっちゃいました。

**今やクラゲの水族館として
世界に知られる加茂水族館。
その歴史を振り返ります。**

全国的に鉄道の開通が広がった昭和のはじめ。鶴岡と湯野浜間でも鉄道を求める声が高まり、昭和5年に「庄内電鉄」が開通しました。それに合わせ、湯野浜温泉では旅館を増設。地元有志たちは、鉄道で訪れる観光客をもてなそうと、資金を出し合って水族館を設立しました。それが加茂水族館のはじまりです。

その後、戦時下に入ると水族館は軍の所有に。戦後は水産高校の校舎を経て昭和28年に加茂町へ返還され、水族館が再開します。その2年後、加茂町が鶴岡市と合併したため名称を「鶴岡市立加茂水族館」と変更しました。しかし初代の水族館は構造的に冬期間、開館できない造りだったため、通年で開館できる新たな建物を求める声が高まりました。

昭和39年、建物を新築移転。新館実現にあたって加茂町は、山から木を切り出し、多額の資金を出資して尽力しました。これが昨年まで開館していた水族館です。

現在、館長を務める村上龍男さんが市職員として水族館で働き始めたのは、この2年後のことです。



初代、二代と歴史を紡いで
昭和5年に現在の県立加茂水産高校の地に誕生した加茂水族館。
昭和39年、現在地に二代目加茂水族館が新築移転しました。



初代【昭和5年～】

昭和5年、加茂町の有志によって開館。初代館長は、湯野浜温泉の旅館「亀や」社長の阿部与十郎氏。館内には洒落たレストランもあり、庄内浜で見られる魚介類が展示された。



二代目【昭和39年～】

開館当時は20万人を超える人々で連日大賑わい。その後、激動の歴史を送った。ピラルクやラッコ、ペンギンなど、どれも懐かしい動物たち。なんと猿やアライグマ、ハナグマがいた時代も。

アシカショーを始めた頃の
現副館長・奥泉和也さん



オタリアも
いたよ



た。その翌年には鶴岡市が水族館を民間企業に売却。村上さんは27歳という若さで突然館長職を任命されます。「結局、売却から4年後にその会社の営業不振で水族館が閉館してしまった。水族館に泊まりこんで皆で動物の世話をしたけど、収入がないから餌代さ困ってしまった。そしたら地域の人が黙ってお金を置いていってくれたんです。新聞で募金を呼びかけてくれた人もいての。それで何とか別の企業が手をさし伸べてくれるまで食いつながることができました。その時のことは、今でも感謝しています」と村上館長は語ります。

昭和47年、民間水族館として再開。村上館長と飼育員たちは、訪れる人々に喜んでもらおうと奮闘します。しかしその数年前から近県に新潟水族館や男鹿水族館といった大型水族館が続々オープンしたことなども影響し、入館者数はどんどん減少していききました。

しばらくして村上館長は客足を呼び戻すためアシカショーを始め、その担当者として入社したのが、現在副館長を務める奥泉和也さんでした。奥泉さんはすぐに鴨川シーワールドへ研修に行き、昭和59年にショーを始めますが、入館者数の増加にはつながりません。コツメカワウソなど当時話題の生き物も積極的に導入しますが、ラッコを入れた平成6年には「ラッコの神通力が効かない水族館」と全国紙で揶揄されました。「ここを立て直そう」と常にいろいろやってきたけれど、何をやってもダメでした。ラッコも他の水族館では入館者が倍増するのにかえって借金を抱えてしまっていた。この時はもうだめだろうと覚悟しました。

しかし入館者数が過去最低の9万人台まで落ちた平成9年、ほのかな光が水族館に射しこみます。

**地元で愛されて誕生した水族館は
その後、苦難の歴史を歩みます。**



昭和42年頃のスタッフ集合写真。村上館長はどこにいるでしょう。



クラゲと出会い 世界の水族館となるまで

1997-2013

平成25年の閉館まで
50年間お世話になりました。



どん底の時に出会ったクラゲ。
階段を駆け上がるように
世界のどこにもない水族館へ。

平成9年、特別展の準備を進めていた奥泉さんは、水槽のライト下に小さな生物が泳いでいるのを発見しました。不思議に思っただけの水族館に尋ねると、サカサクラゲの赤ちゃんが展示用のサンゴにくっついていたポリプから繁殖したものだと教えられます。試しに奥泉さんは餌をあげて、大きくなったクラゲを展示してみると、それを見たお客さんが大喜び。思わぬ手ごたえに驚いた奥泉さんと村上館長は、すぐに海で採取するなどしてクラゲの種類を増やして展示をしました。するとさらにお客さんの喜ぶ姿が。2人は嬉しくなり、種類を増やしてクラゲ展示を充実させようと思いましたが、サカサクラゲ以外はすぐに死んでしまいます。「それなりに工夫してもダメで。2年くらい経った時、奥泉くんが『わかった』と。サカサクラゲは底にくっついていてただだから飼うのが簡単だけど、他のクラゲは泳がせるシステムがかった専用の水槽じゃないと飼えないと言っています。ただお金がないから、高価なクラゲ用水槽が買えなくて」と村上館長。

それでも初めての手ごたえを掴んだ奥泉さんは自力で工夫を重ね、ついに平成11年、加茂方式のクラゲ水槽を開発。飼育を実現しました。同時に繁殖にも取り組み始め、クラゲの卵を探すために必要な顕微鏡が買えない中、奥泉さんはまたも自力で繁殖を成功させます。「あの時の嬉しさは天にも昇る気持ちだった。奥泉くんは、その後ようやく手に入った顕微鏡をのぞいて、小さなクラゲの光り輝く生命力に感動しての。その感動を子どもたちにも伝えたいと、クラゲ学習会を始めたんです」。

こうして地道に工夫を重ね、クラゲを1種類ずつ生態解明していった加茂水族館は、平成12年に日本一クラゲの展示種類が多い水族館になりました。この流れに乗って村上館長は「クラゲを食べる会」という前代未聞のイベントを発足、全国的な話題となります。その勢いはとどまることを知らず、17年にはついにクラゲの展示種類数で世界一に。一連の優れた実績と研究成果は国内外の専門家からも一目置かれるようになり、22年にはオワンクラゲの緑色蛍光タンパク

二代目水族館で起きたすべての出来事が、新たな水族館の実現へ。



昨年11月の閉館イベントにて。榎本政規鶴岡市長と加茂水族館職員の皆さん。



平成11年
「クラゲ学習会」スタート。クラゲの生態や繁殖などについて楽しく学びます。



平成12年
「クラゲを食べる会」スタート。定期的に行われ、これを元に平成18年、クラゲレストランがオープンしました。



平成14年
35年ぶりに鶴岡市営に。翌年、クラゲの繁殖室に富塚陽一市長揮毫の看板「鶴岡市クラゲ研究室」が掲げられました。



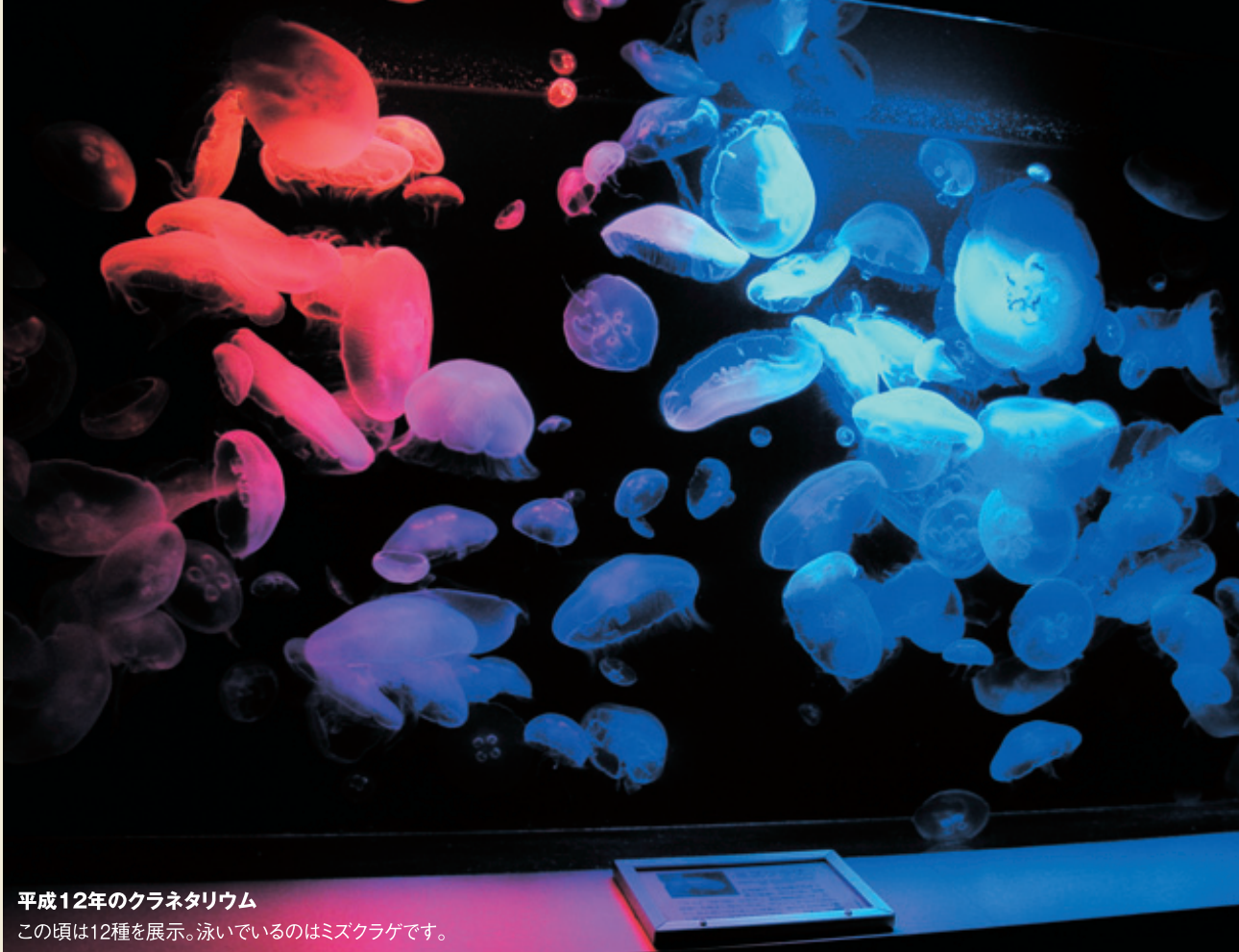
平成22年4月
ノーベル化学賞の下村脩先生が奥様と来館。1日館長となりました。



平成25年11月
閉館イベントでは、ゴンチチがお別れコンサートを開催しました。



平成26年3月
市民ボランティアがクラゲを新水族館に移動。オープン間近です。



平成12年のクラネタリウム
この頃は12種を展示。泳いでいるのはミズクラゲです。

クラネタリウム、誕生

ふとみつけた小さな生物との出会いから4年目の平成12年、狭く古い館内に、クラゲ専用の展示室「クラネタリウム」が誕生しました。



屋外のアザラシプール



淡水魚コーナー



外観は海に浮かぶクラゲをイメージ



海水魚コーナー



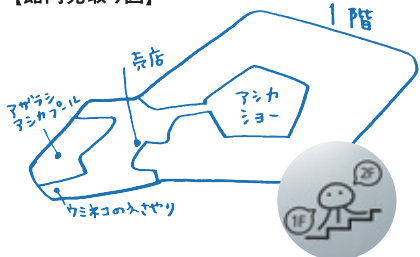
キッズコーナー



庄内の磯釣り文化コーナー



【館内見取り図】



前の駐車場だった場所に建設された新館。館内中央部にあるショープールは、アシカたちが水中で泳ぐ姿を見られるようになった他、テラスや屋上に向かう通路からも眺められるように。芝生が敷き詰められた屋上には、ピロティの売店などで購入した軽食や飲み物の飲食もできます。アシカショーのお姉さんや魚類担当のお兄さん、売店のお母さんたちお馴染みの顔も勢ぞろい。

加茂水族館へ 特集 3 行こう

庄内浜の生き物や 浜文化を中心に 地域の宝を目指して。



の親しみやすさ、温もりがそのま ま残されていました。最初の展示は「庄内の磯釣り文化」から。壁面には村上館長お手製の庄内竿が何本も飾られ、庄内の磯浜が描かれている昔の絵図や、磯釣りを奨励した庄内藩の歴史なども紹介されています。次はいよいよ魚の展示スペースへ。イワナなどの川魚から庄内浜でお馴染みのマダイやアカエイ、深海のズワ イガニと、順路を進むに連れてくるで陸地から深い海の中へ探検していくかのような構成になっています。「こうした館内の見せ方から水槽の設計、柱の配置一つ一つまで、アイデアはすべて職員たちが考えました。現場のことは現場に聞くのが一番ですから」と館長。タラ場を再現した展示には、山形県の漁業や庄内浜の食文化などを紹介するパネルもあり、庄内浜の魅力が多面的に紹介されています。「展示内容は今までと同じ庄内浜の生き物が中心です。当館はもともと地元加茂町の人たちの熱意で生まれた水族館だし、地元のことを広く内外に知ってもらって、それが最終的に地域の活性化につながれば一番ですから」。

幻想的なエントランスから 世界最多50種展示の クラゲドリーム館真髄へ

暗い順路を抜けると、ヒトデなど磯の生き物に直接触れられる「キッズコーナー」があります。そこでひと遊びしたら次はメインのクラゲ展示へ。ここからは奥泉さんに案内していただきました。「クラネタリウム」のエントランスには、子どもたちによる多種多様なクラゲの絵が勢ぞろい。先に進むと薄暗い順路に沿って、さま

平成24年の着工から約2年。今年6月1日、早朝から人々が行列を作る中、三代目加茂水族館がオープンしました。その名も「クラゲドリーム館」。海に浮かび、回遊するクラゲをイメージした外観は、加茂の磯浜で真っ白に輝いています。村上館長から館内を案内していただきました。明るく、開放的な2階入り口から館内に入ると、天井からクラゲのオブジェがぶら下がっています。壁面にはクラゲをモチーフにした

可愛らしい案内表記が。よく見ると随所に遊び心が施されています。「これは、『クラゲを食べる会』を始めた時に気づいたな。まじめに考えていてはダメ。常識を超えたもの、人に話した時に笑われるぐらいのことでない」と成功しない。それからは馬鹿くさいことが平気のできるようになっての」と村上館長。ふと館長が着ている法被の胸元を見ると、お茶目な格言。一見、都会的に大変身したかのようにみえる加茂水族館には、今まで

今までの夢をのせて クラゲドリーム館、誕生

ショータイムスケジュール

午前		午後	
9:30	クラゲの給餌解説	13:30	アシカショー
10:00	アシカショー	13:45	あざらしタッチ
10:15	あざらしタッチ	14:00	クラゲの給餌解説
11:00	クラゲ給餌解説	14:30	ウミネコの餌付け
11:30	アシカショー	15:30	アシカショー
11:45	あざらしタッチ	15:45	あざらしタッチ
12:00	ウミネコの餌付け	16:30	クラゲの給餌解説

加茂水族館館長 村上龍男さん 昭和14年、東京都原宿生まれ。山形大学農学部卒業後、民間企業を経て昭和41年に鶴岡市立加茂水族館に勤務。42年に館長となり、以後47年にわたって加茂水族館と苦楽を共にしてきた。





屋外のアザラシプール



淡水魚コーナー



外観は海に浮かぶクラゲをイメージ



ハナガサクラゲ



クラゲバーにて



クラネタリウムのエントランス

前の駐車場だった場所に建設された新館。館内中央部にあるショープールは、アンカたちが水中で泳ぐ姿を見られるようになった他、テラスや屋上に向かう通路からも眺められるように。芝生が敷き詰められた屋上には、ピロティの売店などで購入した軽食や飲み物の飲食もできます。アンカショーのお姉さんや魚類担当のお兄さん、売店のお母さんたちお馴染みの顔も勢ぞろい。



海水魚コーナー



庄内の磯釣り文化コーナー



鶴岡市クラゲ研究室



クラゲバーにて



ヤナギクラゲ

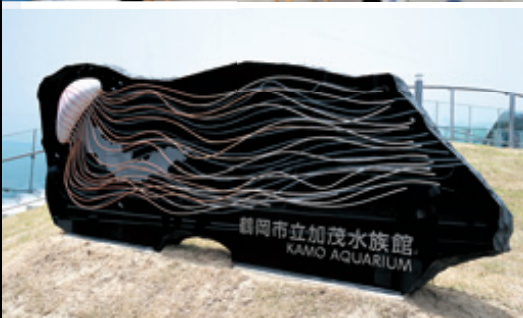
【館内見取り図】



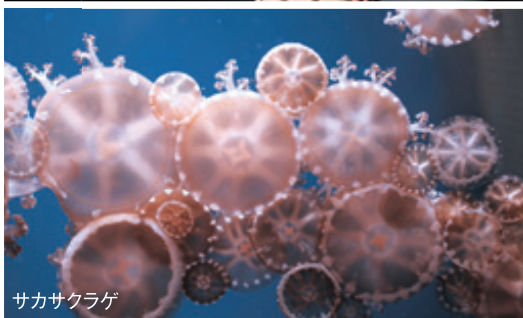
キッズコーナー



庄内の磯釣り文化コーナー



鶴岡市立加茂水族館 KAMO AQUARIUM



サカサクラゲ



ヤナギクラゲ

最初の展示は「庄内の磯釣り文化」から。壁面には村上館長お手製の庄内竿が何本も飾られ、庄内の磯浜が描かれている昔の絵図や、磯釣りを奨励した庄内藩の歴史なども紹介されています。次はいよいよ魚の展示スペースへ。イワナなどの川魚から庄内浜でお馴染みのマダイやアカエイ、深海のズワ

3 加茂水族館へ 行こう 庄内浜の生き物や 浜文化を中心に 地域の宝を目指して。

の親しみやすさ、温もりがそのまま残されていました。

暗い順路を抜けると、ヒトデなど磯の生き物に直接触れられる「キッズコーナー」があります。そこでひと遊びしたら次はメインのクラゲ展示へ。ここからは奥泉さんに案内していただきました。「クラネタリウム」のエントランスには、子どもたちによる多種多様なクラゲの絵が勢ぞろい。先に進むと薄暗い順路に沿って、さま

幻想的なエントランスから 世界最多50種展示の クラゲドリーム館真髄へ

「展示内容は今までと同じ庄内浜の生き物が中心です。当館はもともと地元加茂町の人たちの熱意で生まれた水族館だし、地元のことを広く内外に知ってもらって、それが最終的に地域の活性化につながれば一番ですからの。」

イガニと、順路を進むに連れてまるで陸地から深い海の中へ探検していくかのような構成になっています。「こうした館内の見せ方から水槽の設計、柱の配置一つ一つまで、アイデアはすべて職員たちが考えました。現場のことは現場に聞くのが一番ですから」と館長。タラ場を再現した展示には、山形県の漁業や庄内浜の食文化などを紹介するパネルもあり、庄内浜の魅力が多面的に紹介されています。

4 加茂水族館へ 行こう 訪れるたびに 驚きと感動がある 世界で一つの水族館へ

の親しみやすさ、温もりがそのまま残されていました。

暗い展示室に戻り、幽玄なクラゲを眺めながら曲がりくねった順路を進むと、突如、暗闇に大きなクラゲ展示を通して 世界中に水族館の 新たな展示の可能性を

「ここには現在50種を展示しています。これは、世界のどこの水族館の人が来ても腰を抜かすほどの数ですが、この数はもうあまり意味がありません。大事なものは見せ方です」と奥泉さん。ふと頭上に「クラゲバー」の看板が。クラゲ栽培センターをパークウンターに見立てたこの空間は、顕微鏡で成長段階のクラゲを観察したり、職員がクラゲの生態について解説したりと、楽しみながらクラゲについて学ぶことができます。またその一角には「鶴岡市クラゲ研究所」も。奥泉さんから中に入れてもらうと、70名収容のレクチャールームと、奥には研究室がありました。「専用の機材はかなり充実しました。基礎研究に必要な10ミクロンの顕微鏡も2台あります」。

今までにキタミズクラゲの繁殖成功で「繁殖賞」を、オキクラゲの累代繁殖成功で「古賀賞」を受賞した奥泉さん。近年はその実績から、山形大学理学部の半澤直人教授らとパラプロジェクトに参画したり、海外から訪れる水族館の専門員にレクチャーをしたりと、めざましく活躍しています。「今後はこの設備や今までの研究実績を生かして、大学や研究機関のお手伝いをしていければと考えています。学生たちの研究の場、教育の場として、この研究所をどんどん提供していきたいですね。」



庄内写真季行 19 庄内沖

黄色い花のようなサンゴと
色鮮やかな、小さな魚。庄内の海中にて
夏を連想させるワンシーン。

毎年夏、庄内沖には対馬暖流に乗って色鮮やかな生物がたくさんやってくる。体長2センチというすこぶる小さいこの魚もその一つで、7月頃から観ることが出来るソラスズメダイだ。

庄内の海中は地味に思われがちだが

ちゃんとサンゴも存在する。思っているイメージとは異なるが、これは一つが黄色い花のようなムツサンゴ。知ってか知らずかソラスズメダイは、よくこのサンゴのそばにいる。海中にて夏を連想させられるワンシーンだ。



庄内人なら誰もが暑くなってくると
食べたくなく、夏の名物詩
何でも京都に由来があるとのことだけれど
アチラの南禅寺豆腐は丸くない?!

南禅寺屋の 南禅寺豆腐

手のひらサイズのまあるい豆腐。弾力とハリがあるけれど、箸でつつけばほろりと崩れ、口の中で大豆の味が広がっていく。これはご存じ南禅寺豆腐。夏季限定の庄内版冷奴だ。

元祖はその名も酒田の南禅寺屋。もとは当主小寺家の先祖が西回り航路華やかだった頃、お伊勢参りに向かう途中の京都で病に倒れ、路銀を使い果たしたことに始まる。家に帰るためには稼がねばと南禅寺に住み込んで働いた際、せっかくだからとご当地名物、豆腐の製法を身につけた。帰郷後、俗に肝煎小路と呼ばれる通りに店を開き、豆腐を売るとたちまち評判に。作り方も広まり、いつしか庄内中の豆腐屋が手がけるようになった。

小寺家に代々伝わるこの言い伝え。確かに京都南禅寺の周辺では、お寺の精進料理を起源にした有名な豆腐がある。庄内には、方言をはじめさまざまな生活風習に上方の影響が見てとれる。だから両者の関連性は確実とみて間違いない。だが、本場京都の南禅寺豆腐は、丸くないどころか湯豆腐にして温めて食べるという。どこでどう違っていったのか。それを思うとやはりこちらの南禅寺は、この地で育まれてきた郷土のものなのだろう。

ちなみに豆腐の代表格、木綿豆腐と絹ごし豆腐は、木綿でこしたものを木綿豆腐、絹布でこしたものを絹ごし豆腐、というわけではない。製造工程の違いで生まれる食感イメージを名前にしたものだ。製法的にも、味わいのにも、両者の中間にあるという冷え冷えの南禅寺豆腐に生姜をのせて、醤油をたらして、味わう。当たり前前に食べてきた食べ物に、日本文化の奥深さを感じた。



酒田市日吉町にお店を構える南禅寺屋の創業は江戸末期。以来、同じ井戸水で各種豆腐を作り続けている。南禅寺豆腐は、大鍋に豆乳を入れ、にがりを加えながらかき混ぜ、しゃくしですくって円筒の型へ流し込んで固めるという昔ながらの作り方。毎年4月から9月中旬までの季節限定製造で、暑い日には一日1000パック以上作る時もあるとか。

南禅寺屋 [☎0234-22-0581](tel:0234-22-0581)



本丸からの眺め

緑陰の 山城跡を歩く

緑濃き初夏、澄み渡った青空から日差しが降り、川面に映って思わず目を細める。温海川、庄内小国川、鼠ヶ関川では、いよいよ鮎釣りの解禁日を迎える。鮎釣りというと山奥の溪流かと思うが、ここは、海からそう遠くない。

飛ぶ鮎の底に雲ゆく流かな ー上島晃貴

庄内小国川に沿って歩くと「古城小国の里」の看板が目に見え、突如、幅の広い一本の道路と、その両側に家が立ち並ぶ町並みが現れる。宿場町当時の町割りのままのようで、集落の南端に小国関所跡がある。ここが江戸時代には小国

街道の要衝の地であったとは想像ができないほど、今はひっそりとしている。

日本海に面して走る国道7号は、今でこそ眺めのよいなだらかな道であるが、昔は羽州浜街道といい、海岸線ぎりぎりまで険しい岩がせり出し、難所が多くあった。そのため、庄内と越後を結ぶ山街道（小国街道）が表街道として利用さ

れ、浜街道は裏街道の様相だったという。

小国関所跡を進むと、山裾に朱色の鳥居が立ち、参道を杉木立が縁取る。社叢へ続く石段の最上部の一本が一番古く、その樹齢はいつたいどのくらいなのでしょう。小国城本丸跡に面するようにして、城の鎮守と伝えられる熊野神社がある。五月の例大祭では、江戸時代から伝承されてきた神輿と大名の渡御が練り歩く。

水馬水ひつばつて歩きけりー上田五十石

神社の近くに、小さな池を見つけた。水面にはアメンボがすべり、水中にはメダカやイモリやおたまじやくしがいる。少し歩くと、今では廃校になり、宿泊施設となっている旧小国小学校の木造校舎が佇む。広いグラウンドに立って目を閉じると、子どもたちの声が聞こえてくるようだ。山法師と楓の木が、校舎を見守るように添え立っている。

城山の麓竹皮脱ぎにけり ーあべ小萩

小国集落に入っただけで右手に入ると、小国城跡への登り口がある。数本の山法師と都忘れの群生が並んで出迎えてくれた。入り口の竹林を進むと竹落葉の感触が足に優しい。鬱蒼とした杉木立の中に入れば、足元にはウワバミソウの花が咲き、シダ類の林床が木漏れ日をいっぱい

に受けている。一人がようやく歩けるほどの道を山腹へと登ると、突然、平坦な広場が現れる。「駒立場」である。尾根伝いに立つと、山の面を駆けのぼる風が、汗ばんだうなじを心地よくなでる。「駒立場」を境に植生はがらりと変わる。ブナやミズナラのトンネルをくぐり、足元には胡桃の殻や栗の毬。二羽のクロアゲハが道案内をしてくれた。途中、ごく最近にできたクマハギ（熊が木の皮をはいだ跡）を見つけた。「三の丸」「二の丸」と過ぎ、歩き始めて一時間ほどで「本丸」に辿り着いた。ここからは遠く日本海、そして眼下には小国集落と街道が一目に見渡せる。

夏の蝶小国の裔のこゑ響く ーあべ小萩

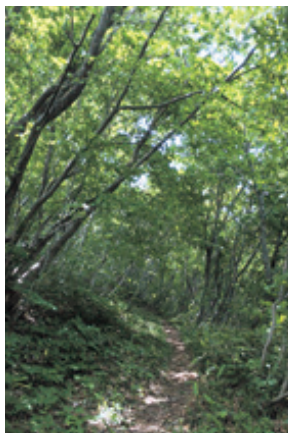
小国城跡は日本海側では珍しい山城跡で、平成十四年に国史跡に指定された。羽越国境と主要街道を守るために十四世紀に築城されたとみられるが、一六一五年「一国一城令」により廃城となった。

「本丸」に立ち、初めてこの景を見ることができたことが不思議であった。地元にいっても行ったことのない場所、理由がなければ行かない場所は、じつはたくさんある。今はひっそりと静かな古の場所を訪ね、日常の喧騒から自らを解放し、時の変遷に思いを馳せた。

写真文Ⅱあべ小萩俳人協会会員・月刊俳誌「月の匣」同人



温海小国地区



ブナのトンネル

